

## 公開シンポジウム

### 「講」研究の可能性 一人のつながりの追究に向けて―

#### 趣旨

現代社会は、ある面で人のつながりを捉えにくい社会である。それは、広域に展開する交通網の整備が地理的な制約を取り払い、昨今の急激な情報技術の高度化が対面すら必要としないあらたなつながりをもたらしていることに象徴される。こうした多様化する人のつながりを改めて主題化することは、現代的な意味を持つテーマであるといえよう。

人のつながりについては、民俗学も地域社会をフィールドとした多くの成果がある。なかでも櫻井徳太郎は、研究課題の一つに「講的人間結合の本質」の解明を挙げ、講を事例としてその結合そのものを主題化しようとした。しかし、その作業は課題を示すだけにとどまっている。本シンポジウムではこの主題を継承しながらも、対象を講の周辺、講以外の集団にまで広げ、人間結合、人のつながりのあり方を考察したい。

講の総合的な把握は困難さがつきまとう。構成員やその性格は多様で、かつ一つの講集団が性格を変化させながら存続していく例も多いからである。しかも講集団は必要に応じて結ばれ、必要がなくなれば解かれる性格も持つため、内部のつながりは緩やかなものとなる。本シンポジウムでは、この講集団のつながりの緩やかさにあえて注目をしていきたい。人のつながりが緩やかで、固定化することがないままの集団の分析は、多様化する人のつながりを視野に含むことができ、さらに緩やかなつながりだからこそ社会に活用される様をも分析の俎上に乗せることができるのではないか。そしてこのつながりの特徴を注視する姿勢により、講集団だけにとらわれない視点から、櫻井が解明しようとした「講的人間結合の本質」の追究が可能になるのではないか。

本シンポジウムでは講の持つ人のつながりの緩やかさ、講集団そのものの緩やかさに着目して「講的」な人のつながりを問う方向性を示し、「講」研究の可能性を探ってみたい。

**日時** 2018年10月13日（土）13:00～16:00

**会場** 駒澤大学駒沢キャンパス3号館2階207教場

#### 報告

川又俊則（鈴鹿大学）「人生100年時代の信仰グラデーションと講集団」

菅根幸裕（千葉経済大学）「講の近世から近代への変容について―房総の大山講・出羽三山講を事例に―」

戸邊優美（埼玉県立歴史と民俗の博物館）「女講中と女性同士のつながり」

コメンテーター 福田アジオ 三木一彦（文教大学）

コーディネーター 高木大祐（成城大学民俗学研究所）